

ヤップ島における観光化と伝統文化

—— 比較論的—考察 ——

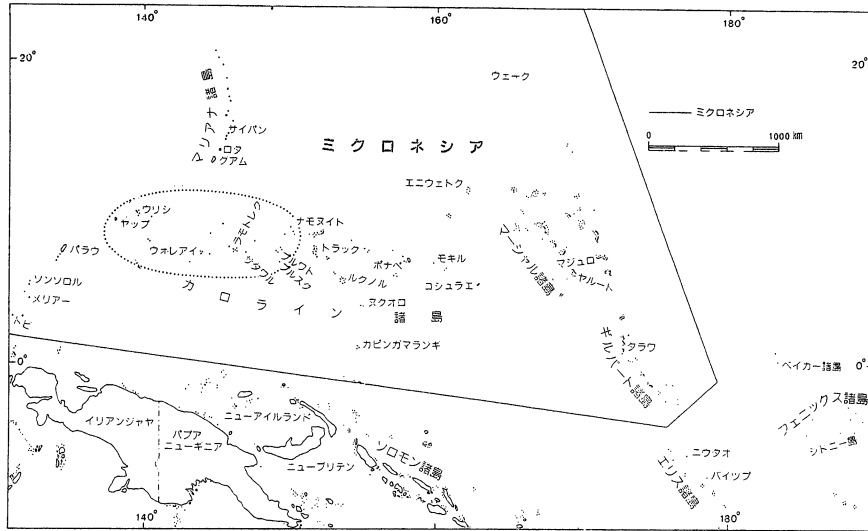
桑 原 季 雄

1 はじめに

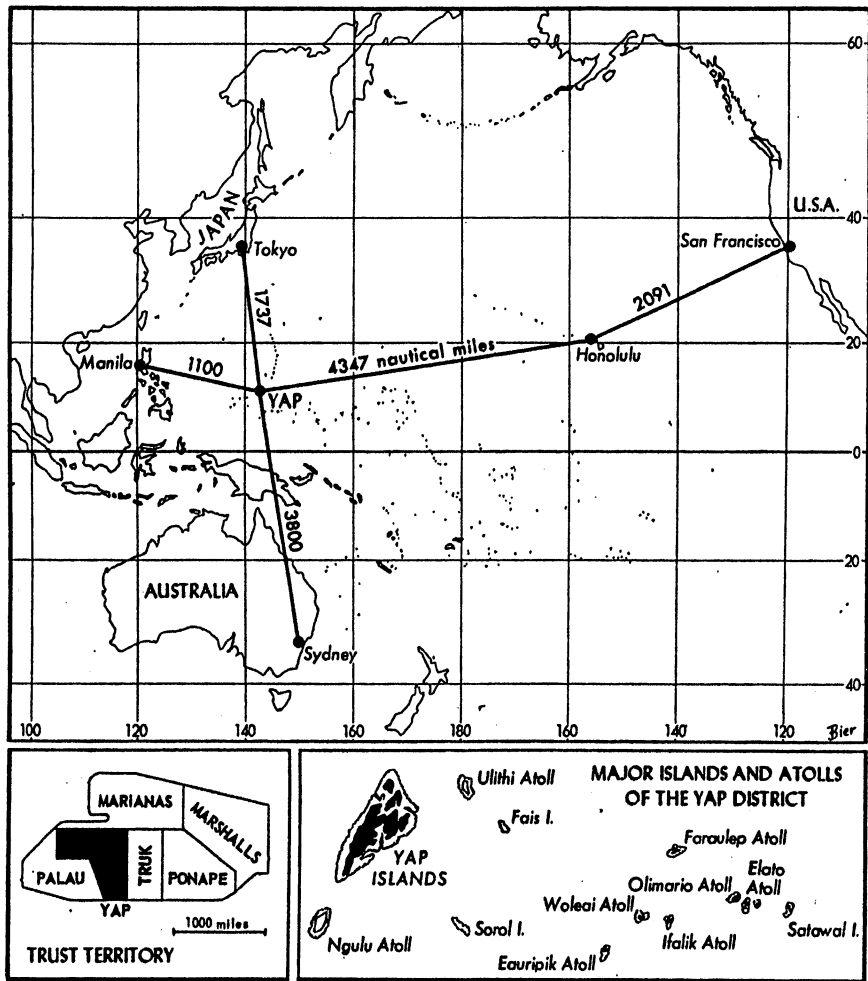
巨大な石貨とダイビングの海で知られるヤップ島は、ポンペイ (Ponape), チューク (Truk), そしてパラオ (Palau) とともにミクロネシア連邦 (FMS) を構成する4州のうちのひとつ、ヤップ州に属する島である。ミクロネシア連邦は、人口約110,000人、面積約700平方キロで、1986年11月にアメリカ合衆国の国連信託統治領から独立し、首都はポンペイ州のパリキールである。ヤップ州はこのミクロネシア連邦の西端に位置し、ヤップ本島部と外島部からなり、外島部には本島部から西の方に向かってウリシー (Ulithi), ファイス (Fais), ウォレアイ (Woleai), イファリク (Ifalik), フララップ (Faraulep), エラート (Elato) などの環礁 (Atoll) と、本島部から最も遠いサタワル (Satawal) 島など約11の環礁と島からなる。また、ヤップ本島部は、ヤップ本島 (Yap Proper) とマップ (Map), ガギルートミル (Gagil-Tomil), ルムン (Rumung) の4島からなり、グアム島の南西約800km, 東京から約3,200km, マニラから約2,000km, ホノルルから約8,000km, そしてシドニーから約7,000kmの距離に位置する (地図1, 地図2参照)。ヤップ本島は、マニラ, パラオ, グアム, チューク, ポンペイの各島や都市とコンチネンタル・ミクロネシア航空によって結ばれている。また、本島部と外島部を結んで、およそ3ヶ月ごとに島々を巡回する定期船が就航している。

ヤップ州の州都はヤップ本島部東岸に位置するコロニア (Colonia) で、州の人口はミクロネシア連邦の人口全体の約10%にあたる11,000人、また、ヤッ

地図1 ミクロネシアとヤップ州



地図2 ヤップ島の位置



(出典：Lingenfelter 1975, p.6)

プ本島部には州人口の62%にあたる約7,000人が住む。ヤップ本島部は10管区と約100の集落からなり、面積は約100平方キロで、これは州の陸地面積全体の84%にあたる。

本稿は、ヤップ島において伝統文化がどのように維持されているのかを、観光化の問題との関連で考察する。これまでの人類学の分野における観光人類学的研究から明らかなことは、伝統文化の再生あるいは維持ということが、例えば観光化といった外部の力を取り込むことによって可能であるということである (Picard 1990, 1996, 山下 1992, 1993, 1996, 1999)。太田によれば、観光現象を考察するための理論的装置として二つのアプローチがある。一つは、自然や社会に対する観光の経済的影響を追求する「経営学的分析」であり、もう一つは、文化や伝統という現地の人々の生活それ自体が、観光対象になることへの批判を込めた「文化の商品化」論的アプローチである。後者の「文化の商品化」論は、さらに、文化が「見せ物」となったため本来の社会的な意味を失い廃退してしまったというバスク地方の事例から、逆にそのことがかえって文化の自己展開を促したというバリ島の文化観光の事例まで、大きく二つに分かれている (太田 1996: 208-209)。本稿では後者の「文化の商品化」論的観点から、ヤップの伝統文化と観光化の関係を探り、ヤップにおいて観光が伝統文化の再生・維持・強化のための外部の力となりえているかどうかを検証する。即ち、バリ島の事例に代表されるような、伝統文化の自律性がある程度観光化という外部の力を借りて行われうるという観光人類学的視点から、ヤップにおける外部の力と伝統文化の再生・維持との関係の考察を試みる。従って、本稿では後半部分で、バリ島の文化観光を一つのモデルにして、ヤップの事例との比較考察を行い、ヤップの特徴を浮き彫りにしようと試みる。そこで、まず最初に、ヤップ社会の伝統文化の実状について、簡単に見ていくことから始めよう。

2 ヤップの社会と伝統文化

ヤップの社会や文化の最も大きな特徴は、社会や文化に対する土地の規制力が非常に強く、土地がヤップの文化的イデオムになっていることである。ヤップ社会の基本的な生活単位は「タビナウ」(*tabinaw*)と呼ばれる屋敷地、特に石積みの土台(ダイフ *dayif*)が付属している一区画の土地である。ヤップでは、「土地に力がある」と言われるように、あらゆる屋敷地は格付けされ、各人の保有する土地の位階と年長制に基づいて、政治・宗教的諸職能につく資格と特権が付与されている(Lingenfelter 1975: 92-99)。即ち、その土地のランクに応じて、個人の政治的ランクや宗教的職能があらかじめ決まっているのである。

タビナウはまた、独立した食料資源保有単位でもある。職能と特権を内包している各ダイフには、屋敷地以外の他のプロット、即ち、タロイモ田、ヤムイモなどの畑、漁場、石積みの追い込み(フィッシュ・トラップ)、ヤシノキ、林、山など、あらゆる食料資源領域が一つのセットとして付属している(牛島 1987: 54)。この多様な食糧資源領域の存在がタビナウのメンバーの自給自足を高め、維持しているのである。しかし、近年、ヤップでは多くの集落で人口減少の結果、政治的・宗教的職能や特権ばかりでなく土地も様々な相続様式を通じて数少ない残留者の手に集中してきているのが実情である。

ここで、過去20~30年の間に村がどのように変化したかを、ヤップ島北西部ファニフ(Fanif)管区のラン(Rang)村のインフォーマントの話にそってみたい。まず、目に見える大きな変化の一つは、みんなが服をつけるようになったことである。伝統的なヤップの服装は、男はスュー(*thuw*)と呼ばれるフンドシ、女はラバラバ(*lava lava*)と呼ばれる腰巻きで、両者とも上半身は裸であった。最近ではフンドシや腰巻きだけで出歩く人はほとんど見られなくなった。年輩の人が特別な機会にフンドシをしているくらいである。ただ、現在でも州都コロニアの町では、外島から来た人たちが年齢を問わず、男は青いフンドシ、女は腰巻きだけで歩いているのをみかける。

次に、以前と比べて食生活が大きく変化したことがあげられる。特に若い人

がタロイモよりも米を多く食べるようになったことや、ほかにも、ラーメンや缶詰などの嗜好品が好まれるようになった。また、魚などの生鮮食料品も店で買うことが多くなったという。さらに、昔は、慣行的に、子供は母親と一緒に食事を取り、父親と一緒に食べることはなかった。そして、成人したら親とは別々に食事をとっていた。しかし、現在、子どもたちは父親とも一緒に食べるようになった。また、昔は、一匹の魚でも祖父母、父母、子どもの間で食べる部分が決まっていたが、今はそうしたこともなく、みんなで分け合って食べるようになったという。そしてさらに、昔は畑も、男用の畑と女用の畑は区別されていたが、現在、そのような慣行は崩れてきている。

村の生活での大きな変化は、生活が便利になり良くなってきたことや、また、昔は様々な習慣など難しいことが多くてある意味で大変だったこともあったが、現在は、そういうことも少なくなって楽になってきたという。例えば、昔は、道を歩くときには一列になって歩かなければならなかった。また、ひとりで出歩く時には、木の葉っぱあるいは木の枝などを手にさげて歩き、年輩の人の前を歩く時には腰を低くして歩かなければなかったが、今では、こうした慣行も次第に守られなくなってきた。さらに、子供たちは、かつて、村では、年輩の人たちの静かな生活を乱さぬよう、大声で騒いだりしないで静かに振る舞うよう厳しくしつけられたが⁽¹⁾、今日では、子供たちが村の中でも騒がしいという。また、昔は年輩の人や相手の財産に対して尊敬の態度がみられ、許可なく人の土地へ入ったり物をとったりすることはなかったが、最近では、民主主義のゆえか、年長者や他人の財産に対する尊敬の態度がみられなくなってきたという。

交通の便が格段によくなったこともここ数十年の間の大きな変化である。交通の便がよくなったこととあわせて、町での仕事が増えた。日雇い人夫やコロニアでホテルのボーイ等々、多くの人が賃金をもらって生活するようになった。昔は金がなくても生活できたが、今は何をするにもお金がなければ困ることが多い。しかし、金を持っているからといって村の中で力を持つようになるとは限らないという。また、村の子供たちの中には、留学したり軍人になったりしている人が多く、子供たちからの送金によって、以前に比べるとお金を使う機

会が増えた。テレビは若い人の家にはたいていあり、電話はほぼ全世帯にある。車を所有する世帯も多くなった。

このように、過去20～30年の変化は、食生活やライフスタイルの大きな変化となって現れている。生活が豊かで便利になる一方で、年輩者や相手の財産に対する尊敬の態度が失われつつあることが指摘される。

また、年中行事は現在ほとんど行われなくなったという。メンズハウス (*peebay*) は今でも使われていて、現在でも原則として女性は入れない。かつて、メンズハウス (コミュニティ・ハウスともいう) では、若者たちは大人たちから、やっていいこととやってはいけないこと、例えば、隣村に行く時はきちんと許しを受けて、明るいうちに行かなくてはならず、暗くなってから行っ てはいけないことや、貝貨や石貨のこと、ダンス、建物の作り方、漁業のことなどを習った。今では、若者が少なくなったか、あるいはライフスタイルの変化により、特別な機会を除いてメンズハウスに大人と若者が集って語り合うことも少なくなった。昔は、また、月経小屋 (*dapal*) もあったが、現在は使われていない。

昔と比べて行われなくなった特に重要な行事や儀礼として結婚儀礼がある。昔は結婚の際に貝貨や石貨の交換など様々な交換がともなったが、今はカトリック教会か裁判所で簡単に済ませるだけで、村人全員で祝うこともなく、家族単位で個人の家で祝宴をあげるだけだという。今でも女性の側から女財 (タロイモ、ヤムイモ、石貨1個) が男の側に送られる⁽²⁾。また、男の側からは男財 (魚、大きな貝貨1個) が女の側に送られる。結婚は、かつては、息子が結婚したい時、恋人をつれて両親の家に泊まり、翌朝父親が息子に問いつめ、意志を確認するとすぐ女の子の家に走って彼女の親ときちんと相談して決めていたというが、現在はこうしたことがなくなってかなり自由で簡単になった。

村人の多くはカトリックを信仰しているが、暗いところや怖いところにいるとされるヤップの土着の神様も信仰されている。また、葬式は儀礼の中で最も盛大な儀礼で、人が病院で亡くなると家に移して通夜をし、その後カトリック方式で土葬にされる。墓の場所を教会の墓地にするか、あるいは村の墓地にす

るかは個人の選択に任されている。埋葬は穴を掘って死体をコンクリートの墓穴の中に安置し、親族の葬式の度に死体を重ねて埋葬する。妻方の親族の葬式には男財を送り、死者を女たちだけで1～4日見守る。また、9の倍数で儀礼を行うともいわれる。

現在、村の行事として行われているものにムル（会食）というのがある。従来は結婚式の時とか、あるいは毎年1～2回行われる程度であったが、現在は数家族が日を決めて一緒に集まってやる。料理は持ち寄りで、家族が全員参加するという。

このように、ヤップでは、村落社会のレベルで見ると、かつての生活と比べてかなり変化してきたとはいえ、今日でもタビナウに象徴される伝統的社会体制の枠組みは根強く保持され、人々の経済生活において、基本的にはこのタビナウという土地保有制度に依存した自給自足的な社会体系が比較的強固に持続している。若い人たちを除けば、村人の食生活は基本的には自前のタロイモとヤムイモ、魚などの伝統的な食生活が維持されている。他方、ヤップ島あるいはヤップ州全体のレベルで見ると、貨幣（商品）経済の著しい浸透により、賃金（月給）に依存した生活の比重が若い人ほど高くなり、米や魚、嗜好品などを買って生活する度合いが大きくなっていて、ヤップの村人の生活の政治的経済的自律性を支えてきた伝統的な自給自足体系が足下から崩れかかっていることがうかがえる。

3 伝統文化の復元と継承

ヤップの伝統文化として重要なものに各村や地域のダンスがある。現在ヤップ本島で行われているダンスとしては、ファニフ（Fanif）管区で4つ（女性たちによる Nayer, Talmer, Nguchig, Fagalbitir）、ウェロイ（Weloy）管区で3つ（女性たちによる Talelog, Thol Ngal, Yafis）、ガギル（Gagil）管区で1つ（女性たちによる Tagchal Yimal）、ルル（Rull）管区で3つ（女性たちによる Targosu, Epung, Tiyor）、ルムン（Rumung）管区で2つ（男性による Nugu Fach fach と

女性による Magpafil), カニファイ (Kanifay) 管区で3つ (女性による Mal ni gaa, Mal ni toluk, Mal ni achig) の合計16あるとされる (The Yap Networker 1999.8.6 Vol.1(7))。ダンスは村によっていろいろな目的で踊られ, 観光客への上演という以外に, 若い人たちへの自文化の啓蒙というのもある。毎年3月1日のヤップデーには各管区から儀礼の踊りを出す。また, 国連の日の10月24日は, いくつかの村が集まって踊りの機会をもつ。

ウェロイ (Weloy) 地区のオカウ (Okaw) 村の女性たちは毎週日曜日に一緒に集ってヤップの伝統的ダンスを習っている。ダンスは3つで, そのうちのタレログ (Talelog) と呼ばれるダンスは, これまで村のメンズハウスやコロニアのホテル, そして一度は村で外国の大使の訪問を歓迎して踊られた。他の2つのダンスはともにバンブー・ダンス (竹棒踊り: *gamel'*) である。この2つのバンブー・ダンスは1983年に, オカウ村のメンズハウスのグランド・オープニングに上演するためとして, オカウ村の同盟村であるガギル地区のガチャパル (Gachapar) 村から購入されてきたものである。このダンスと引き換えに, 貝貨 (*yar*) や貝ビーズ (*gaw*), 石貨 (*rai*) その他の贈り物が, ガチャパル村に贈られた。村のすべての女性たちはこのダンスに参加しなくてはならず, もし参加しなければ, 村の活動に参加しなかったということで何らかの罰則が科されるという。罰則には壊れた石畳の小道 (ストーン・パス) の修理, メンズハウス周辺の清掃, 地元の財貨 (*machaf*) の提供, あるいは村の年輩者から命令されたことは何であれ行うことなどが含まれている。このように, オカウ村に生まれたか, あるいは婚入してきたすべての女性たちが伝統によってダンスと村の様々な活動に参加することが義務づけられている。このダンスの練習の目的は, 子供たちに自分たちの文化を学ぶことや自分たちの文化に対する誇りを教えたいからであるとされる。ヤップ人にとってヤップのダンスを習うことは, 自分たちがいったい何者であるか, 即ち, 自分たちのアイデンティティについていかに関心があるかを示す一つのユニークな文化的方法であるという (*ibid.*)。今日のヤップ人は, 現在の変化の時代に, 自分たちの文化のユニーク性について認識したり評価したりし始めているようだ。

伝統文化の復元の一例として、石組みの梁 (fish trap) の保存作業がある。これは、ガギル地区のレン村 (Leng) やリケン村 (Riken), ワニアン村 (Wanyan) と、ウェロイ地区のケン村 (Keng) やオカウ村で、歴史保存委員会 (Historical Preservation Office=HPO) の文化保存プログラムの一環として、保存作業が行われてきた。このHPOのプログラムはアメリカ内務省によって資金提供され、梁やストーン・パス、民家、儀礼を行う聖なる場所の復元と、口承による歴史の記録を通してヤップの文化と伝統の保存と振興を目指している。

HPOは、これまで多くの村でストーン・パスの復元に協力し、経済的に支援している。例えばルル地区に3つ、トミル地区に3つ、ガギル地区に3つ、ルムン地区に一つ、ウェロイ地区に一つ、マープ地区に2つの、合計13の村で復元作業にあたっている。各村にはストーン・パスの復元に\$800が資金提供され、作業期間は平均3ヶ月である。ストーン・パスの復元のねらいは、観光客を引きつけるためだけではなく、若い世代の人たちに自分たち自身の生き方としての自分たちの過去を見させ、ユニークな生き方を持っているヤップの文化と伝統を保持していくためだといわれている (The Yap Networker 1999.7.30 Vol.1(6))。このように、ストーン・パスは観光客ばかりでなく地元の人を引きつけるためにも復元されているのだ。こうして、昔の生活を復元するために、村人はストーン・パスの掃除を分担して受け持ち、毎月の検査も入るといふ。HPOでは、人々にヤップの文化の一部である様々な伝統的建築物を、復元作業を通して理解してもらい、それを次の世代に伝えていきたいと考えている。

それでは、伝統文化の世代継承はどうなっているのでしょうか。現在、ヤップには本島と離島に公立高校が1校ずつある。本島のヤップ高校は生徒数500人で、商業、工業、農業、機械などの技術訓練コースがあり、米国から導入されたミクロネシア市民教育やコンピューター教育なども行っている。ただ、ヤップの高校においては、伝統文化の教育は、習慣の違う各地域の子どもたちが集まるため難しいという。だが、ホームルームで伝統文化に関わるモラルの討論や、それぞれの地域の服装で登校する日を設けるなど課外活動で取り組んだりしている (宮古新報 1998.11.15)。例えば、ヤップ高校の生徒たちは毎年10月

15日を「文化の日」とし、グラススカート、フンドシ、ラバラバ、レイなどの伝統的な衣装を着けて祝う。また、ヤップの伝説や民話に基づいた寸劇を披露したりする。こうした活動を通してヤップ文化に対する誇りを持たせようとしている (The Yap Networker Vol.1(18) 1999.10.22)。

ヤップでは、近年、ヤップ文化が失われていくという危機感から、伝統文化に対するアイデンティティが強くなってきている。そのため、州政府は伝統文化の教育に力を注ぐようになってきた。なかでも、低学年向けの教科書でヤップの童話や民話をはじめ、カヌーの乗り方や料理方法、食べられる木の実など生活に係わることなどを取り挙げるなどしている (宮古新報 1998.11.15)。また、最近の子供たちの中にはヤップ語の数を理解できない子も出てきているため、現在小学校の1年生から4年生までは英語を教えないでヤップ語だけのカリキュラムの導入も検討されているという。

4 ヤップにおける観光化

ヤップ島の観光客の数は、1980年から1990年の間に3回急増する時期がある。まず、1985年に前年の868人から1,316人と急増し、ミクロネシア連邦として独立直後の1987年には前年比の77%増の2,000人に、そして1990年には前年比の66%増の3,894人へと増加している。そして、1996年と1997年は5,000人を超えた。国別の観光客統計を1996年～1999年でみると、最も多いのがアメリカ合衆国で、1,945人～2,351人の間で推移し、全体の割合も43%～52%で推移している。次に多いのが日本人観光客で、少ないときの722人(19%)から最も多いときが1997年の1,455人(27%)の間で推移している。

ヤップは石貨の島として有名であるが、最近では、それ以上に世界的クラスのダイビング・サイトとして知られるようになった。特にヤップの海は高い透明度とジャイアント・マンタ (Manta Rays) で知られる。通常、世界中のどここの海でも、マンタを見ることが出来るチャンスは極めて小さいといわれる。しかし、ヤップの海はダイバーたちにとって、体重が1トン、翼の長さが4メー

トルを超すジャイアント・マンタに、多いときには一度に十数頭も出会えるまたとない海として知られる。このヤップ島には日本からも大勢のダイバーがグアム経由で訪れる。ヤップ島には現在、宿泊施設として、ホテルが7つ、ゲストハウスが1軒ある。また主なダイビング・ショップは4店あり、うち2店は日本語で対応できる。なかには日本人ダイバーを相手に日本人女性が経営している店もある。ツアーの内容は、マリン観光と島内観光があり、マリン観光はダイバーのスキルや要求に応じた様々なタイプのスクーバダイビングとスノーケリング、ボートクルーズ、フィッシングなどがある。

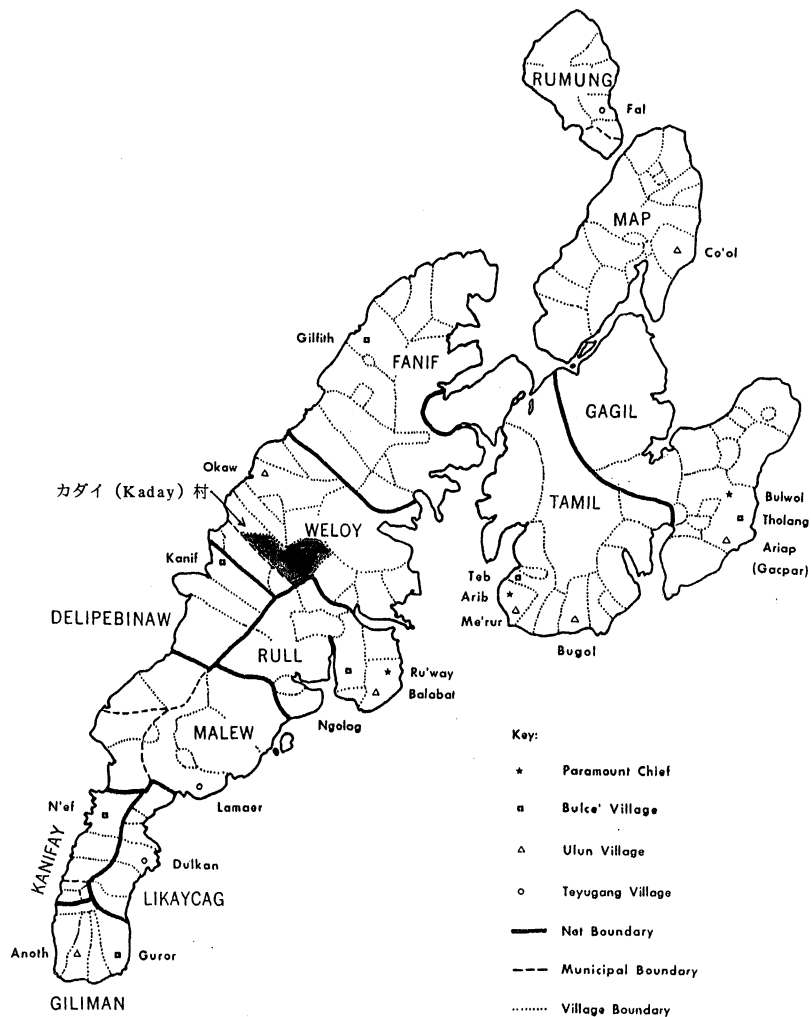
島内観光はヴィレッジ・ツアーと称し、ガイドの案内で、すでに提携しているいくつかの村を車で案内する3時間コースと、車とボートで村の観光ばかりでなく海のマングローブ観光も楽しめる5時間コースのもの、そして2時間半のヴィレッジ・ダンス・ツアーが用意されている。日本からの観光客の多くは、その目的がダイビングにあり、ヤップの文化観光を目的としてくる人は非常に少ない。ダイバーの多くは滞在日数の多くをダイビングに費やし、島内観光はオプションであることが多い。島内観光で観光客が案内されるのは、主に、空港近くのゼロ戦の残骸と、本島東側の海岸に面したところにあるカダイ(Kaday)村だけである。カダイ村は、ガイドが前もって入村の予約を入れておき、到着すると石貨や石畳の小道、メンズハウスの周辺を中心に村の中をゆっくりと案内して回り、伝統的儀礼や慣習について説明し、観光客の質問に答えていく。ヤップ本島の他の村に関しては、観光客にほとんど開かれていないため、せいぜい通過するか、あるいは石貨やメンズハウスのみに立ち寄ってみるくらいで、村の中に無断で立ち入ることは許されていない。この観光上のタブーについては、島内観光の出発に先立ってガイドから詳しい説明がなされる。それは、ヤップの村が土地、海岸、道路のすべてが私有地であるため、島内観光を希望する場合には訪問する村に対して事前に許可をえることが必要であり、従って、無断で入村してはいけいないこと、また、村では許可なく写真撮影をしてはいけないことや、ココナッツや植物を勝手に取らないこと、村の中や村を通過するときには大声をあげて騒いだりしてはいけないことなどについて、

何度も注意される。また、観光パンフレットにもこうした注意書きがされていることが多い。以下では、カダイ村のヴィレッジ観光の実際についてみてみよう。

5 カダイ村の文化観光

ヤップ島の中でも唯一観光化を積極的に推進しているのがカダイ (Kaday) 村である⁽³⁾ (地図3参照)。カダイ村では、「カダイ村・文化振興会」(Kaday Community & Cultural Development Organization=KCCDO) を組織して観光村

地図3 ヤップ本島部



(出典：Lingenfelter 1975, p.135)

の建設を推進し、1996年頃から観光客を村に受け入れるようになった。カダイ村の人口は約60人で、当初は観光客のために村を開放するつもりはなかったが、ある時、村のダンスをみたカダイ村出身のホテルのディレクターが、村を観光客に公開するよう要請したことから観光化が始まったとされる。

観光村の建設は、まず、村の修復と復元の作業から始まった。村の中心部に位置するメンズハウスやその周辺の石畳の舞踊場 (*malal*)、道路と村の中心部を結ぶ幾筋かの石畳の小道 (ストーン・パス)、メンズハウスの前の石畳の道と舞踊場に並べて置かれた大小さまざまな石貨などが修復され、復元されていた。この修復にかかる資金の一部は献金によるほか、日本人の青年海外協力隊員も観光村の修復作業に参加し、また資金的な協力も行っている⁽⁴⁾。現在では、毎週土曜日の午前中に村人が総出で村の整備をすることになっている。また、今後はさらに、海岸の近くの若者小屋 (*faluw*) と月経小屋 (*dapal*) が修復の予定となっている。

観光村建設の活動は、村の修復作業のほかに、若い世代に伝統的文化を教えるということがあった。カダイ村では、ヤップ文化を保存維持するため、毎週金曜日に村の年輩の女性たちが、小学校から高校までの若者や子供達にダンスや編みかご、グラススカート、竹細工、フィッシングネット、フンドシ (スュー) の作り方などを教えている。

カダイ村では、コロニアの3つホテルと提携して、毎週火曜日と土曜日に観光客を受け入れ、村のガイドによる観光案内と、ダンス、椰子の葉のバスケットの編み方の実演とココナッツジュースがパックになったツアーを提供している。これら3つのホテルはそれぞれのホテルの宿泊客を一緒に集めて毎週火曜日と土曜日の午後4時30分頃に行われる文化観光に参加することになっている。このパッケージツアーには、地元のガイド付きのストーン・パス散策、小中高生と小さい子供たちによって踊られるカレウ (*Karew*) と呼ばれるカルチュラル・ダンス、かご編み、椰子の木の木登りの実演、質疑応答による村の文化の説明が含まれる (写真参照)。ツアーの費用は1回につき200ドルで、各ホテルはツアーに参加するゲストの数に応じて分担する⁽⁵⁾。また、この特別のツアー

カダイ村の文化観光



パッケージの他に、誰でも3ドル支払うことによって、いつでも個人ベースで村を観光できることになっている。

カダイ村では、月1回村会を開き、毎月の収支報告が行われているが、観光収入の一部はダンサーに支払われ、残りの大半は、2001年にアメリカからの財政支援が終わるのに備えて、子供達を学校にやる奨学金の基金に積み立てられ

ているという。

「カダイ村・文化振興会」代表のイヌグ氏 (Constantine Yinug) は、カダイ村観光化の将来について、観光客が毎日バスで大勢観光にやってきて、観光客をさばけなくなるのではないか、あるいはまた、村人が目先のお金に目がくらみ、1回ごとのダンスを短縮してダンス上演の回数を増やすといった金儲けに走り、自分たちの文化を商品化してしまうのではないかと危惧する。

以上、ヤップ島の観光化について、特にその文化観光の側面を中心にみてきたが、以下では、このヤップの伝統文化と観光化の関係を考察する分析の枠組みとしてインドネシアのバリ島の文化観光に関するこれまでの研究を参照し、ヤップとの比較を試みてみよう。

6 バリ島の観光人類学

世界的な観光地として知られるバリ島は、インドネシアのジャワ島の東隣に位置する愛知県程の面積を持った島で、人口は約300万人である。インドネシアの全人口の約9割がイスラーム教徒という中であって、バリ島はヒンドゥー教徒の島として知られる。「最後の楽園」, 「神々と芸能の島」など様々に形容されるバリ島は、現在、欧米やアジア各地の多くの国々からたくさんの観光客が来島する。1993年には88万人を超える外国人観光客が訪れ、その後も年々増加し、現在では年間100万人を超すといわれる。特に1990年代に入って、日本からの観光客がオーストラリアを抜いて最も多くなったといわれる。

バリ島は観光客ばかりでなく人類学をはじめ多くの人文系隣接諸科学の関心を集めてきた。とりわけ人類学においては、1970年代以降、観光人類学が興隆し、バリ島に関しても観光についての多くの人類学的研究が行われ、理論的にも価値ある研究が数多く産出されてきた。このバリ島の観光人類学の研究の特徴は、一般に、観光地が、観光化によってもたらされる画一的な商業文化の拡大によって伝統的な文化を衰退させる傾向があるのに対し、バリでは観光開発とともに伝統文化の再生や保護育成、伝統的なものへの回帰現象が平行してみ

られるというものである (McKean 1989, Picard 1990, 山下 1992, 吉田 1997)。バリ観光の売り物はこの島が育んできたヒンドゥー教に根ざしたエキゾチックな儀礼や祭礼, 舞踊, 音楽, 演劇, 絵画などの伝統文化や芸能・芸術であり, これらエキゾチックな宗教的伝統文化はバリ島の観光産業の根幹となるものである。そして, こうした伝統文化が存在するからこそ, バリ島の観光化と経済発展が可能となるのであり, 逆に伝統的なものが失われれば観光地としての魅力も半減し, 従って近代化も進行しないだろうということが考えられる (吉田 1997)。このように, バリでは, 観光開発が伝統的な社会組織や伝統文化をより強化する方向に向かわせてさえいる。

このバリの伝統文化は, 今世紀初頭のオランダの植民地支配下において進められた観光化のもとに成立したものである。ゆえに, 「バリにおいては, 近代化が進行するにもかかわらず伝統が維持強化されている, ということではない。観光を起点として近代化が進行するがゆえに伝統がクローズアップされ, 強化されるのである。伝統の強調・強化は近代化のひとつの様相なのである」(ibid.)。このバリの「伝統」の一つの起源は, ヨーロッパ人によって形成されたバリのイメージにある。そしてこの伝統の形成・発展には, 観光とともに, バリ研究も大きく関わっている。1930年代を中心とした時期にバリに長期滞在した欧米の芸術家や人類学者たちは, バリを宗教と芸術に満ちあふれた, 豊かで安定した社会として捉えた。また, 彼らの, 物質的にも精神的にも豊かな「楽園バリ」というイメージは, こうして1930年代に確固たるものとなった。現在バリで見られる, 特に観光客向けの芸能や美術品は, この時期に確立されたものであることが研究者の間で通説となっている。即ち, バリの伝統文化は, その当初から観光と結びついていたのであった。今日, バリの芸能文化の代表的なアトラクションであるケチャ (*kecak*) をはじめとして, バリの主要な舞踊や劇の創作や改作には, 直接的あるいは間接的に, 外国人観光客や外国人研究者が関与してきた⁽⁶⁾。この島の伝統芸能・芸術は今も昔も観光の目玉であり, その活性化は, 外貨獲得の重要な手段である観光産業の維持・発展にとって, きわめて重要な意味をもつので, バリの伝統・文化・芸術の高揚は, 経済的に

大きな意味があるのである。

このように、今日バリの「伝統」と言われるものは、実際は観光用につくられたものであったり、外国人観光客との接触において産み出され、本質的な変化を加えられたものである。バリの伝統はまさに近代的な産物なのである。「失われつつあるバリの伝統と、それと同時に起こりつつあった観光産業とをタイアップさせるかたちで、バリの伝統は保存されてきた」(ibid.) のであった。

以上のように、バリ島の事例から明らかなことは、バリ島の伝統文化の活性化を刺激する一つの具体的な契機として、観光があげられるということである。バリ島の伝統文化は、観光化に触発されて活性化されてきた。このことは、観光という「外部」の力を取り込むことによって伝統文化の再生・維持が可能になるということである。次に、こうしたバリ島の観光人類学的研究の視点を踏まえて、バリ島の文化観光との比較でヤップの観光の問題を考察してみよう。

7 バリ島とヤップ島

ヤップ島とバリ島に共通しかつ、大きく違うことは、両者ともに植民地経験を有しながら、ヤップでは植民地支配下においてバリ島のような観光化が推進されなかったことである。バリ島では、前述のように、オランダ植民地支配の下、観光化が進み、観光客の眼差しの中で伝統文化の再創造、改作、「文化のインヴェンション」(McKean 1989) が起こった。こうして、バリでは欧米の観光客という外部の力によって伝統の再生と創造が行われてきた。一方、ヤップはドイツ、日本、アメリカの植民地支配のもとで積極的な観光化は行われていない。これにはいくつかの理由が考えられる。一つは、ヤップ島が、バリ島に比べると、島の大きさや人口の規模においてかなり小さく、小島嶼社会ゆえの文化的ボリュームが比較的小さいことがあげられる。また、ヒンドゥーのような「大伝統」に根ざした宗教文化がない分だけ、儀礼や祭礼、伝統的な舞踊や絵画、彫刻などの発達をみなかったといえる。そのため、バリ島におい

てみられたような、「楽園」のイメージの創造者である欧米の芸術家や学者を大勢惹きつけることもなかったといえる。このような歴史的、宗教文化的背景の違いや、島や人口の規模の違いが両者の袂を分かつ要因の一つといえよう。結局、ヤップの観光化が数字の上ではっきりしてくるのは1980年代以降のことである。しかも年間5,000人程度と、100万人のバリとでは比較にならない。ヤップは何ととっても、バリ島に比べて遙かに観光化の歴史が浅いのである。

次に、観光の売り物となる「文化の商品」についてみてみよう。ヤップ島では、観光客へ商品化できる文化のアイテムとして、大きな石貨や伝統的なメンズハウス、若者小屋、そして現在もっと重要な観光資源であるヤップダンスなど、いくつかのエキゾチックな観光アイテムがあるが、バリ島のそれと比べるとはるかに少ない。ヤップダンスはバリ舞踊と違ってそれほど洗練されておらず、また、必ずしも深い宗教文化に根ざしたものではない。このように、観光客に商品として提供できるヤップの伝統文化としては、集落ごとにヴァリエーションがあるヤップダンス、石貨、メンズハウス、石畳の小道、編みかご等の様々な民具、タロ水田などの景観があるが、観光の目玉となりうるのは、ヤップダンスと石貨、メンズハウスの3つといい。しかし、ヤップダンスはいつでもどこでも見られるわけではなく、ホテルで常時鑑賞できるような体勢にまで至っていない。

また、ヤップの社会や文化には観光化に逆行するような価値観や慣行がみられる。とりわけ、伝統的土地所有の慣行が外来者の訪問を拒む要因となっている。ヤップ島ではほとんどの村が、観光客に対して開かれていないため、前述のように、観光客はせいぜい村を通過するか、あるいは石貨やメンズハウスのみに立ち寄ってみるくらいで、村の中に無断で立ち入ることは許されていない。これは、ヤップの村が、そのすべてにおいて私有地であるため、島内観光を希望する場合にはあらかじめ訪問する村に対して入村許可をえることが要求され、従って、無許可の入村や写真撮影、植物採取はいけないなど、多くの観光上のタブーが課されることになる。このように、土地に対するタブーが大きいため、観光客が自由に村へ入れないこともバリとは大きく事情が異なっているといえ

る。このような観光上の様々なタブーは、裏を返せば、ヤップ人の間に、他人の私有地や財産に対する尊敬の念が今でも大変強いということの現れである。かつては、同じヤップ人同士でも、隣村に行く時はきちんと許しを受けて、明るいうちに行かなくてはならず、暗くなってから行ってはいけないとされていた。かつて、子供たちへの親の躰の最も大切な部分も、子供たちが勝手によその村へ行ってはいけないということであったという。同じヤップ人同志でもこのような慣行が根強くあったのであるから、いわんや、よそ者である観光客に対してはなおさらであろう。観光客がレンタカーで村の中を無許可で通り過ぎたために、村人に石を投げつけられたといった話も聞かれた⁽⁷⁾。

では、ヤップ島の場合は、バリ島と違って観光客が少ないので、自分たちの伝統文化に対する関心はそれほど高くないのであろうか。実際には、ヤップ人の間で、近年特に、自分たちの伝統文化への関心が極めて高くなってきているのであった。

例えば、ヤップの多くの村では観光用ではなく、子供たちに自分たちの文化を学ぶことや自分たちの文化に対する誇りを教えたいという目的でダンスの練習が行なわれている。ヤップ人にとって、ヤップのダンスを習うことは、自分たちがいったい何者であるかというアイデンティティに彼らがいかに関心があるかを示すユニークな文化的方法であるといわれる。

ヤップ人たちが自分たちの伝統文化にたいして高い関心を示していることがわかるもう一つの例として、すでに述べたように、アメリカ内務省によって資金提供された HPO の文化保存プログラムがある。これは石組みの梁やストーン・パス、民家、儀礼を行う聖なる場所などの復元あるいは保存のためのプログラムである。これは、こうした伝統文化の復元・保存作業や口承による歴史の記録を通してヤップの文化と伝統の保存と振興を目指すものである。とりわけ、ストーン・パスの復元の目的は、観光客を引きつけるためだけではなく、若い世代の人たちに、ユニークな生き方を持っているヤップの文化と伝統の価値を啓蒙し、保持していくためだといわれている。このように、ストーン・パスは観光客ばかりでなく地元の人をも引きつけるために復元されているのである。

こうして、昔の生活を復元するために、村人はストーン・パスの掃除も分担して受け持っている。このようにHPOでは、人々にヤップの文化の様々な伝統の復元を通して、その伝統文化を理解してもらい、次の世代に継承していきたいと考えている。カダイ村の観光村建設の活動においても、同様に、観光客のアトラクションのための村の修復作業というほかに、若い世代に対する伝統的文化の啓蒙ということがあった。このように、今日のヤップ人は、現在の変化の時代に、ヤップダンスやストーン・パスその他の建造物など、伝統文化の復元を通して、自分たちの文化の独自性や固有の価値について再認識あるいは再評価し始めている。

ヤップの観光は、マリン・ツーリズムが先行し、ダイバーたちの間でヤップの海が評判になるに連れて観光客も増えてきた。アメリカの平和部隊の隊員の一人が、ヤップでダイバーショップを開き、次第にヤップのダイビングの人氣が広まっていったという。そうしたダイバーたちを相手に開始されたのが文化観光あるいは島内観光である。最初からヤップの文化に惹かれてやってきた観光客は少ない。観光客の目的ははじめからダイビングであることが多い。ダイビングの合間にちょっと村を見てまわるといった観光である。いずれにしても、今日のヤップの自文化への関心の高まりと伝統文化の再生・強化への契機は、このような増加しつつある外からの観光客の影響も否定できないが、それでも、バリと違って観光客あるいは観光化の影響はそれほど大きいものではない。

ヤップの近くには観光地で有名なグアムとサイパンがある。ヤップの人たちもグアムやサイパンの観光の発展ぶりをよく知っている。しかし、ヤップ人は、サイパンやグアムの観光の発展をどちらかという、冷ややかに見ているようだ。知事の演説の中にも、サイパンやグアムのような観光化を拒否して、ヤップ独自の伝統的生き方を大切にしていこうという伝統回帰の姿勢がみられる(宮古新報 1998.11.18)。伝統文化の崩壊の危険をおかしてまで、観光化を推進すべきでないという力が働いている。以上のようなことからして、ヤップ島における伝統文化への関心の高まりは、バリ島の場合と違って、観光客のような「外部」からの影響というよりも、むしろ、政治家や行政官僚のリーダーシッ

プのもとでトップダウン式に、「内部」から覚醒させられてきている面もあるように思われる。即ち、バリ島と違って、観光客が少ないことから、伝統文化の再生や創造に観光客あるいは観光化という「外部」の力が十分に機能しているようには思われない。

8 むすび

ヤップの観光化については、カダイ村など一部の村を除くと、観光化にそれほど積極的ではない。むしろ、サイパンやグアムのような観光化を拒否し、ヤップの観光化をコントロールする必要があると考えている人たちも多い。それは、観光化によって伝統文化が崩れるのではないかという恐れが常にあるからである。ヤップ州の政治家のなかには観光化によってもたらされるネガティブな影響の流入、特に麻薬の問題を心配し、観光客の入島をコントロールする必要があると主張する人もいる。この点に見る限り、ヤップの人たちはバリ島と違って、観光化が伝統文化の再生・強化に働くプラスの力に対して極めて懐疑的であるといえる。そして、伝統的な暮らしや生き方を次世代にも残すべきだということが強調されているが、これは、隣のサイパンやグアムの観光化のネガティブな側面を反面教師として、伝統文化の再生と維持・強化の力に結びつけているようにも思われる。このように、ヤップにおける観光化は、伝統文化の整備や再生に一定の貢献をしていることは否定できないが、バリ島のような大きな原動力にまでなりえてはいない。

もう一つの側面は、伝統文化の再生が例えばHPOの伝統文化の復元・保存プログラムにみるように、アメリカによって経済的な下支えをされていることである。ヤップ州はミクロネシア連邦の一員として1986年11月3日に独立した際に、米国と締結した自由連合協定に基づき、15年間の財政援助を受け続けている。このアメリカからの財政支援は年間予算の約70%を占める。この十数年間、ヤップも経済的自立に向けた様々な取り組みが行われてきた。農産物販売や観光、建設などを多角的に経営した民間企業はノウハウや技術の不足と市場

がないため失敗した。また缶詰工場の計画もあったが商業ベースの原料確保が困難で、缶も海外から調達しなければならずコスト高となるため挫折した。現在、産業と呼べるものはない。台湾人資本による縫製工場があり、対米特恵を利用して順調に実績を伸ばしているが、従業員の大半は中国人で、地場経済への波及効果はほとんどないという。

ヤップ州の歳入と歳出のバランスを、1985年から1990年の6年間でみると、明らかに歳出超過であり、歳出が歳入の3倍（1985年）から6倍（1990年）に増加していることがわかる（Yap State Statistical Bulletin 1990：59）。この大幅な歳出超過はアメリカの経済支援によって穴埋めされている。ヤップ州政府は自立に向けて様々な経済振興策を打ち出しているが、一番目の漁業の次に挙げているのが観光業である。しかし、知事はグアムやサイパンのような開発を拒否し、伝統的な暮らしや生き方を次世代に残すべきだと強調する（宮古新報1998.11.18）。2001年に、もしアメリカの経済的支援がほんとうに終わったとしたら、ヤップはその経済的穴埋めをどのような手段でおこなうのであろうか。その時に、観光開発と伝統文化の問題がさらに大きくクローズアップされるように思えてならない。

註

- 1) かつて子供達は村の中では静かにするように言われ、遊んでいるときでもお年寄りの迷惑にならないよう騒音は低く抑えられていた。ただし、村はずれには子供達がおもいきり騒ぐことのできる場所が確保されていた（Lingenfelter 1975：86）。
- 2) 石貨を送る理由は、娘をあげるので、娘がそちらにいる間は大事にし、いらなくなったら無事に返してほしいという意味が込められているという。
- 3) 正確には、現在まで、トミル地区のマー（Maa'）村とウェロイ地区のカダイ村はヤップ本島で文化観光のパッケージツアーを提供しているたった2つの村である。以前はガギル地区のマキイ（Makiy）村とルル地区のティーンズ・ウォーバルス（Teens WorBals=Worwoo' and Balebat' combined）と呼ばれるあるクラブがツアーを提供していたが、今はもうやっていない。トミル地区のマー村の文化観光のツアーは1998年に開始された。現在ツアーに含まれるのは、イブン（Yibung）と呼ばれるスティックダンスと女性たちの座って行うダンス（sitting dance）である。二つとも25歳までの子供

と女性たちによって踊られる。これらのダンスはそれぞれのホテルの要望に応じて不定期に行われる。彼らは観光客から観光料として一人につき25ドルを徴収し、集まったお金は踊りの参加者の間で均等に分配される。

ガギル地区のMakiy村では現在はダンスはもう行われていない。理由はダンスを踊る子供たちが学校があるからだ。彼らが以前ダンスを踊っていたときには、Ayuy Ni Gaa' と Ayuy Ni' Achig という2つのダンスが毎週土曜日の午後1時30分から上演されていた。ダンスの観覧料は350ドルで、お金は上演者たちの間で均等に分配された。Makiy村ではこの文化観光を1996年2月に開始したが、1年後の8月に中止した。

ルル地区のTeens WorBalsクラブがダンスの上演をやめた理由は、カダイ村がルル地区と同じようなツアーを開始したからだという。彼らのパッケージにはダンスの他にストーンパス・ウォーク、かご編み、レイ作り、その他の実演が含まれていた。彼らは毎週火曜日と土曜日に定期的上演を行い、ウエルカムダンス (*tiyor*) とスティックダンスの2つのダンスを上演した。最低限度額として少なくとも200ドルがクラブに支払われた。そのほかに、一人あたり2.5ドルの入村料が徴収され、これはルル地区が受け取った。ダンスは1997年から1998年まで上演され、ダンサーの年齢は12歳から25歳であった。

- 4) 1990年代前半に日本人の青年海外協力隊員がカダイ村に2年間滞在し、歯科医としてカダイ村からコロニアの病院へ通っていた。カダイ村のフィルメッド氏の実家に長期ホームステイし、観光村の修復を村人と一緒になって積極的に手伝ってくれたという。
- 5) カダイ村は、コロニアのマンタ・レイ・ベイ・ホテル (Manta Ray Bay Hotel), E.S.A. ホテル, パスウェイズ・ホテル (Pathways Hotel) と協定を結んでいる。例えば、全部で12名のツアー参加者がいるとして、マンタ・レイ・ホテルから6人、パスウェイズ・ホテルから4人、E.S.A. ホテルから2人であれば、マンタ・レイ・ホテルが200ドルの50%、即ち100ドルを支払い、パスウェイズ・ホテルが33%、E.S.A. ホテルが17%を支払うという計算になる。この200ドルは44.5%がダンサーたちに分配され、40.75%がKC&CDOに、そして、14.75%がその他に支払われる(4%がコンタクト・パーソンに、3.25%がココナッツの提供者に、1.25%がかご編みの実演者に、1.25%がココナッツの木の木登りの実演者に、3%が儀礼に主催者 (Master of Ceremony) に、2%がツアーガイドに分配される)。もし、観光客から寄付があれば、これらの寄付金はまっすぐ将来のカダイ村の子供たちの奨学基金に行くことになっている。
- 6) 今日、観光客がバリの芸能文化として目にするもう一つの代表的なアトラクションであるケチャ (Kecak) は、本来、村の疫病を追い祓うことを目的とした呪術的儀礼の一種であったが、1930年代にバリの芸術文化に大きな影響を与えたドイツ人画家ワルター・シュピースが、ジュル・チャットと呼ばれるこの男声合唱にインドの叙事詩ラーマーヤナのストーリーを組み込んだショーを考案し、さらに、1960年代後半にはラーマーヤナ・バレエの影響を受け、物語性と音楽性が付加されたものである (吉田1997)。

- 7) ツアーガイドも、観光客を案内するときには、立ち寄る村への事前の連絡と許可を忘れない。さらに、観光客に対して村でやっていけないことを繰り返し念をおす。私が無許可でカダイ村を訪れたときも、村人から入村料を払わないと入ってはいけないといわれた。また、カダイ村の近くのサンセット・ビーチに立ち寄ったときにも、村人に許可をもらった。

文献一覧

Development of Yap State 1987

Development of Yap State 1990

市川裕子編

1997 「地球体験チャレンジ ヤップ島プログラム'97報告書」エコクラブ

Ichikawa, Yuko

1997 The Activity Report on Yap Youth Program '97, Tokyo: ECO-CLUB.

Lingenfelter, Sherwood Galen

1975 *Yap: Political Leadership and Cultural Change in an Island Society*, Honolulu: The University of Hawaii.

McKean, P.F.

1989 Towards a Theoretical Analysis of Tourism: Economic Dualism and Cultural Involution in Bali, In V.L.Smith (ed.), *Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism*, Philadelphia: The University of Pennsylvania Press. (スミス編『観光・リゾート開発の人類学—ホスト&ゲスト論で見る地域文化の対応—』勁草書房, 1991)

宮古新報 1998. 11.15

宮古新報 1998.11.18

太田好信

1996 「エコロジー意識の観光人類学—ベリーズのエコ・ツーリズムを中心に—」石森秀三編『二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容3 観光の二〇世紀』, ドメス出版

Picard, Michel

1990 'Cultural Tourism' in Bali: Cultural Performance as Tourist Attraction, *Indonesia* 49: 37-74.

1996 *Bali: Cultural Tourism and Touristic Culture*, Singapore: Archipelago Press.

牛島 巖

1987 『ヤップ島の社会と交換』, 弘文堂

山下晋司

1992 「『劇場国家』から『旅行者の楽園へ』—20世紀バリにおける『芸術・文化システム』としての観光」『国立民族学博物館研究報告』17(1): 1-32.

1993 「楽園バリの演出—観光人類学的覚書」清水昭俊他編『オセアニア2・近代に生きる』東京大学出版会, pp.139-152.

1999 『バリ 観光人類学のレッスン』東京大学出版会山下晋司編

1996 『観光人類学』新曜社

The Yap Networker 1999.7.9 Vol.1(3)

The Yap Networker 1999.7.30 Vol.1(6)

The Yap Networker 1999.8.6 Vol.1(7)

The Yap Networker 1999.10.22 Vol.1(18)

Yap State Statistical Bulletin 1990

Yap Visitors Bureau 1999

吉田竹也

1997 「バリ島の伝統・観光・バリ研究—楽園の系譜学—」森部一他編『変貌する社会—文化人類学からのアプローチ—』ミネルヴァ書房